

* 国立天文台OB加藤正氏から届いた写真

2009年6月25日、東京天文台OBの加藤正氏の訪問を受けた。加藤正氏は、長く東京天文台天文時部のお勤めであった時計の専門家である。原子時計が出現するまで天文時計として日差、1/100秒を誇っていたリーフラー時計の第1人者であった。時計の専門家として日食観測にも隊員として観測に出かけたこともあった。アーカイブ室新聞91号のスワロフ日食の記事に「東京天文台7人のサムライ」の1人として写真に写っている。

その加藤正氏が、親父の遺品の中に東京天文台の古い時代の写真があったと5点の写真を持ってきてくださったのである。その中には、なんと筆者が探し求めていた東京天文台に、先の大戦末期まで立っていて、昭和20年4月に帝国陸軍の手によって倒されてしまった60m鉄塔が写っていたのである。どこかにきちんとした写真があるだろうとは思っていたが、探す手段がなく手をこまねている状態だった折に、なんと降って沸いたような情報提供であった。まずは、提供いただいた写真を紹介しよう。



写真1は、レプソルド子午儀室、ゴーチェ子午環室をバックに写った60m鉄塔である。これは、図1の③の鉄塔に他ならない。まさしくぴったりの位置にあるではないか。こういった写真を探していたのである。そして写真2の、左側の鉄塔は、図1の④、右側の鉄塔は②の鉄塔である。左の鉄塔の右に見える建物2軒は、官舎15号、16号と思われる。当時はこの2軒は三鷹国際報時所の官舎であった。右の鉄塔の右側の建物は、まさに三鷹国際報時所の庁舎である。三鷹国際報時所は昭和23年に東京天文台に移管され、天文時部経度課として昭和41年に新本館（北研究棟）が完成*

写真1 レプソルド子午儀、ゴーチェ子午環のバックに写った60m鉄塔

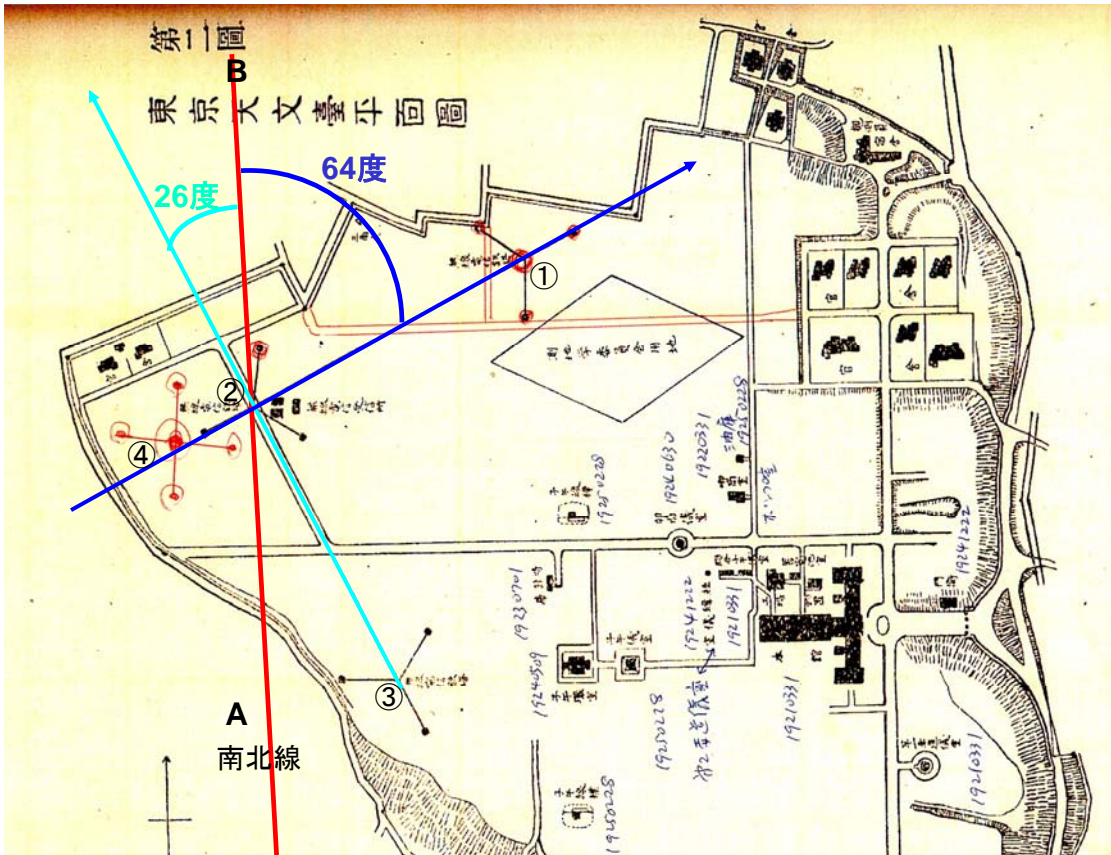


図1 空中線の方向を検証した図



写真2 図1の④、②の60m鉄塔

*するまでは、この場所で仕事をしていた。その後、これらの建物は日本天文学会事務所などとして使用されたが、昭和50年頃、学会の事務所がゴーチェ子午環の北子午線標脇にあった建物に移った時点で取り壊され、現在では門柱を残すだけになっている。この門柱の「三鷹国際報時所」の文字は、寺田寅彦の書と言われているが、現在もその筆跡を追跡中だがまだ確証はない。写真3はすでに何度かアーカイブ室新聞に登場したもののだが、今回、加藤正氏からももたらされた1枚である。なぜかこの1枚のみがセピア色に変色していた。写真3の26吋赤道儀望遠鏡の左に写っている鉄塔は今まで検証してきたように、図1の①の60m鉄塔である。

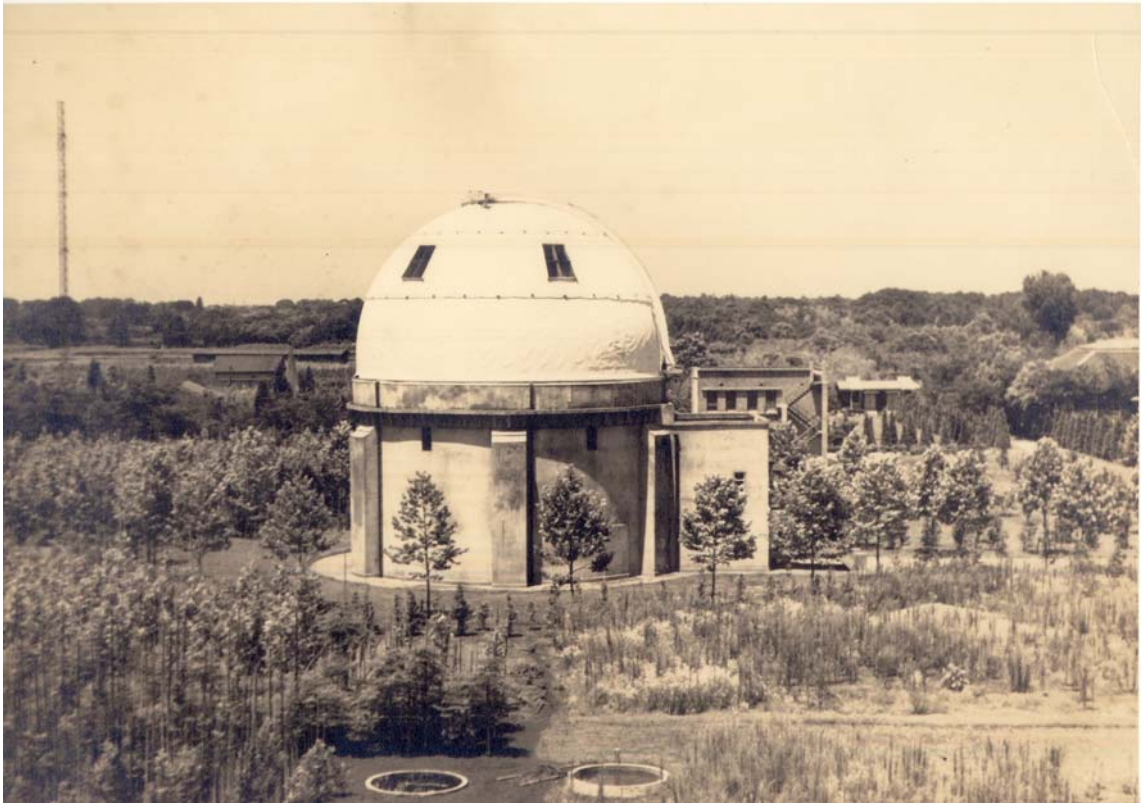


写真3 図1の①の60m鉄塔が写った写真

今まで、アーカイブ室新聞192号に載せた写真4のような不鮮明な写真で60m鉄塔の検証を行ってきたが、今回はこのように鮮明な写真が入手できた。

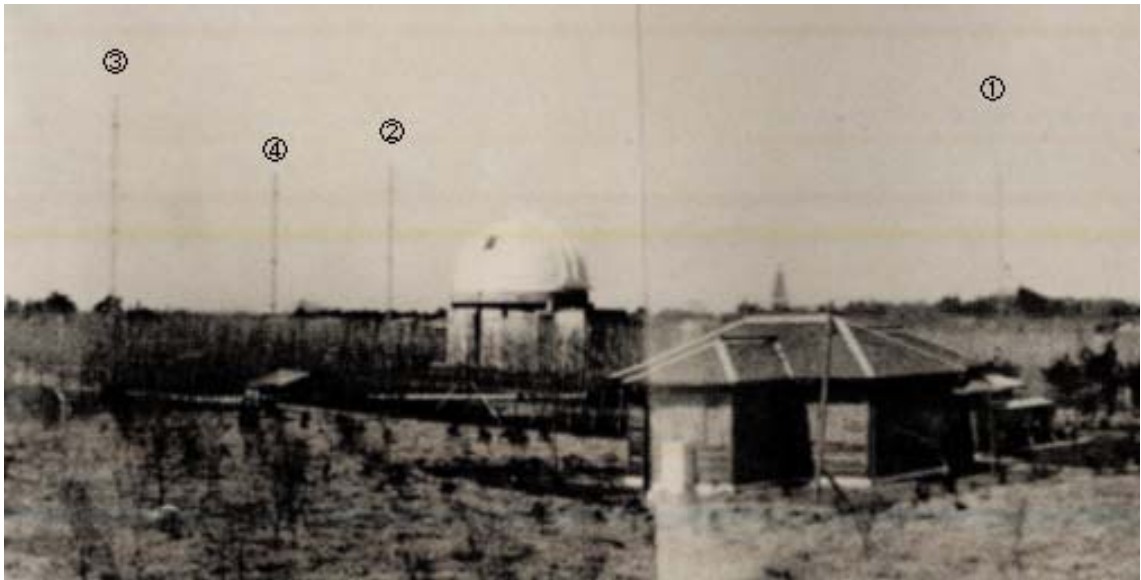


写真4 ブラッシャー天体写真儀ドームから撮影した景色

加藤正氏は、この他2枚の写真をお持ちになった。写真5は旧図書館の上から聯合子午儀を撮影したものである。聯合子午儀室もすでになく、その位置にはすばる解析研究棟が建っている。



写真5 旧図書館屋上から聯合子午儀室を写したもの

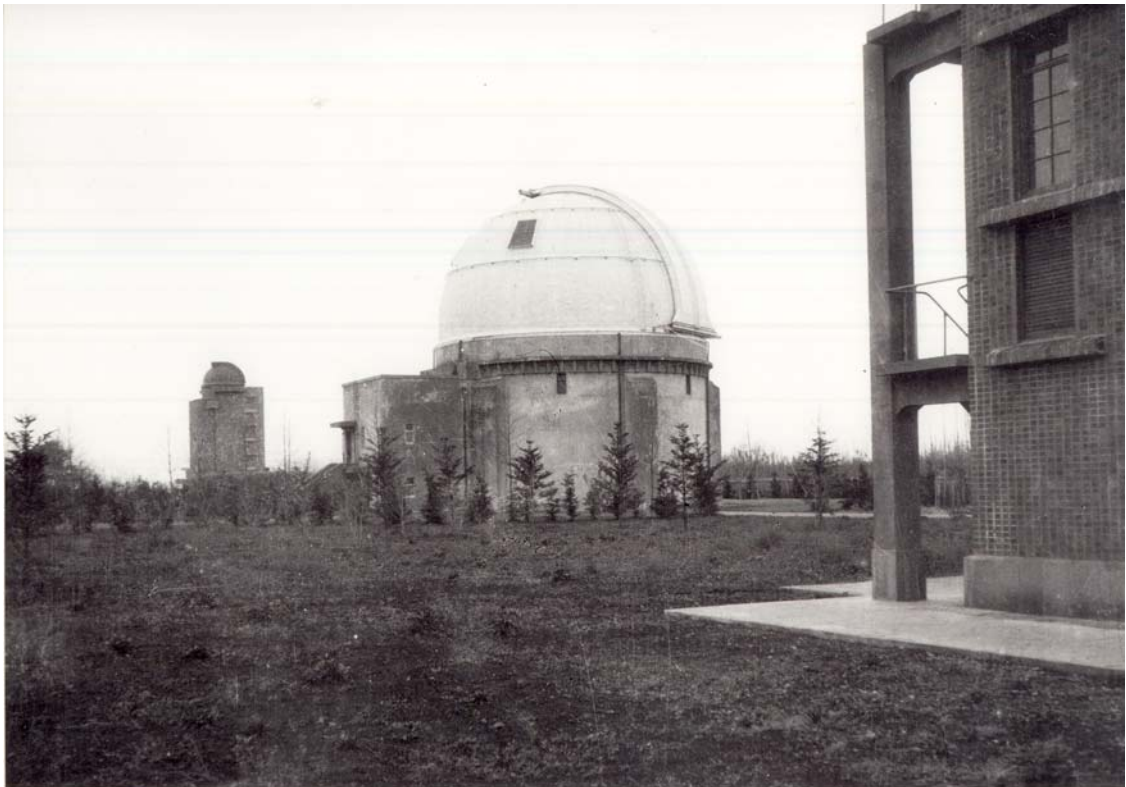


写真6 26吋赤道儀望遠鏡ドームを中心に左に塔望遠鏡、右に旧図書館

写真5の聯合子午儀室の左後ろには11、12号官舎が写っており、聯合子午儀室の右側にはグラウンド南西角にあった倉庫（多分この頃は井上食堂として使用されていた）が写っている。この建物は東大生協天文台支所が置かれたところでもあった。その建物の一部は卓球場であった。最後の1枚、写真6は26吋望遠鏡ドームを中心に、左に塔望遠鏡の建物、右に旧図書館の一部が写っている。この頃の三鷹キャンパスの様子をよく伝えている写真である。現在では畑地を放置したおかげで、「武蔵野の面影を残す森」などといわれているが、東京天文台は広々とした育苗農園が広がっていたし、近在の農家がまだ耕作をしていた土地であった。

加藤正氏はリーフラー時計の第一人者であり、今回の訪問を機に、子午儀資料館に展示中のリーフラー時計の復活を手がけてくれる約束をした。今回は振ってきたような幸運であった。